

富士川通船の出るあたりに往つて見たが、繪になるやうな場處は無い。

十五日は曇つてゐた、七時半に馬車へ乗り、甲府へ向ふ。白峯はチラ／＼頭を出す、乗合の人は、甲府の近處から越中の立山が見えるといふ。

甲府を十一時發の瀛車で東に向ふ、雲が深くなつたので白峯は見えない。沿道の紅葉は少し盛りを過ぎたのか、色が悪い。

汽車の窓から外の景色を見ると、どんな處でもよく纏まつて見える。窓一つ／＼が立派な繪になる、すると、甲府から東京迄、何萬枚の繪でも出來さうなものだが、さて汽車から下りて見ると、繪にする處は存外少ない、何故であらうか。

車窓から見て、何處でも面白く感ずるのには、種々な原因がある、一つ／＼繪に見えるのには條件がある。仕切りのあるといふこと、速く走ること、遠くを見る事で、汽車が停まつてゐてはあまりよく見えない、仕切のあるのは、見取枠から見たやうに、圖の散漫を防ぐ。速に走るために、いつも主要ものばかり目に入つて、細かいウルサイ物は、見る間もなく過ぎ去つてしまふ。距離が遠いために、深味、即ち奥行が充分で、自己の位置が高い爲めに、廣い場所が見え、それが車の速力で、よく纏まつて見えるからであらう。こんな事を考へてゐるうち、いつか汽車は新宿に着いた。(完)

關西美術會展覽會を観る

大下 藤次郎

關西美術會はこの秋第九回展覽會を京都岡崎の美術館跡で開かれた、私は丁度小豆島に寫生旅行にゆく途次、鹿子木寺松諸兄の御案内をうけて一覽した。

會場は東京の竹廻臺陳列館には劣るが、光線の工合も佳良で、陳列場として悪くは無い。繪畫の出品二百四十五點のうち水彩畫は九十六點あつて中々盛むである。

僅々三四十分間の瞥見に過ぎぬから批評は出來ぬが、其際感じたことを少しく陳べて見やう。

由來關西に於て、殊に京都に於ては、故淺井先生の瀟洒にして、淡白なる畫風の感化と、日本畫の影響とにより、關西の水彩畫といふと色の貧しい調子の弱いものばかりであつた、然るに東京博覽會、次ては文部省美術展覽會の開催によつて、關西の人の畫に對する考は變つて來た、枯淡貧弱なものでは展覽會場に他から蹴落される、次には鹿子木氏の力強い畫風は大に刺戟を與へたため、漸次軽い調子が漸く重くなつて來た、筆先の技巧より脱して一步進んで自然に對し眞面目な研究的態度が現はれて來た、今度の展覽會には其徴候を充分認むることが出来る、私は關西畫界の前途に多大の望を囑しつゝ、會場を出た。

(十一月四日)